



2004 年 12 月、2005 年 11 月に続き、3 回目のザンビア訪問である。その間、ザンビアの通貨、クワチャは値上がり続けた。初めての訪問では 1 ドルあたり約 4800 クワチャだったのが、今回は約 3500 クワチャである。その一方で、行くたびに諸物価は高騰している。統計によれば、同期間のインフレーションは年率で約 18 パーセントである。これでは研究費の実質は目減りするばかりだ。何が起きているのだろうか？ザンビアの輸出額の 60 パーセントは銅である。その銅の国際価格は、2001 年末の 1,350US\$/t という史上最安値以来上昇を続け、2005 年末には 4,600US\$/t にまで上昇したのである。ザンビア通貨の高騰と物価上昇は、このような好調な輸出によるものである。しかし、これは典型的な「オランダ病」ではないのか。

1964 年に独立した当時、ザンビアの輸出に占める銅の割合は 90 パーセントを超えていた。1970 年代半ばに銅の国際価格が暴落し銅ブームが終焉するまで、銅からの収入はザンビア経済を潤したが、一方で銅以外の輸出産業の成長が抑制されるなどオランダ病に特有の資源配分の歪みを生じてしまったのである。銅ブーム後、1980 年代の低迷期を経て、1990 年代になりようやく構造調整が実施され、資源配分の歪みは少しずつ是正されてきた。その結果を貿易面でみると、砂糖、綿花、タバコ、切り花などの農産物の輸出が増加し、銅の比率は 60 パーセントにまで低下したのである。しかし、近年の銅ブームの再来は、こうした輸出農産物の競争力を低下させてしまう可能性がある。

本誌 19 号に記したように、前回のザンビア出張は、総合地球環境学研究所（地球研）に

提出するプロポーザルの作成が課題であった。いうまでもなく、わが政策研にはアフリカ研究のための予算がないため、このような外部資金に頼らざるを得ないのである。地球研に提出したプロポーザルは無事に採択され、2006 年度から 6 年にわたる「社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス」プロジェクトがスタートすることになった。その中で、私はテーマ 2「変動する環境への家計とコミュニティの反応」を担当する。

今回の出張の目的は、本格的に現地調査を始めるにあたり、カウンターパートとなる候補機関、候補者と面談し、協力関係の条件などの詳細について話し合うことである。プロジェクトリーダーの梅津千恵子氏（地球研）とテーマ 1 のリーダーである真常仁志氏（京都大学）と私の 3 人で、中央統計局や農業省傘下の農業研究所、ザンビア大学の経済社会研究所など、過去の出張ですでに何度か訪問した相手を訪ね、プロジェクトの実施が決定したことを前提に、具体的な話し合いをした。

私がリーダーを務めるテーマ 2 では、200 戸程度の農家を対象に、5 年間にわたり、生産、所得、消費を記録し、身体計測を行い、各戸の圃場で降水量を測定する予定である。そのような調査体制をうまく構築することが研究プロジェクト成功の鍵となる。しかし、今回の訪問でもまだ確たる自信は持てなかった。西アフリカと違ってザンビアでは大学院教育が整備されていないため、大学院生を調査に動員することもできない。調査を担当する現場の普及員たちは、自分で論文を書くわけではないので、ちゃんとデータを集める動機はないと思われる。さらに、銅景気の再来は、農業セクターにいる希少な人的資源の流出を引き起こす可能性もある。

今回の出張中に、移民局に出向いて調査許可証を受け取った。移民局にいくと、様々な身なりをした大勢の中国人がきていた。中国のアフリカに対する資源外交の活発化が報道されているが、近年の銅価格の高騰も、主として中国における銅需要の伸びが原因と言われている。

彼らの国際的な活動が、政策研にとって貴重な外部資金の目減りの原因となっているわけである。まさに、グローバル化を実感した。